

高大連携におけるオンラインでの授業設計支援

Supporting Instrutlional design by Online Education in high school-university collaboration

宮下 伊吉^{*1}
Ikichi MIYASHITA^{*1}

^{*1}三重大学

^{*1}Mie University

Email: imiyashita@ac.mie-u.ac.jp

あらまし：コロナ禍の影響により、大学では、2020年4月からオンライン授業の急速な実施が広がり、様々な問題点が生じていたことから、高校生が教員になるための小学校での授業実践体験に向けた指導をオンラインで行うことは困難に思われた。本稿は、授業設計から成果の検証方法までを高校生が自分たちで考えることを重視したオンライン（Google classroom, Meet）での授業設計支援という方向に切り替えた実践事例について説明する。

キーワード：高大連携、授業設計、Google classroom, Meet, 探究学習

1. はじめに

2022年度より、高等学校では教新学習指導要領が学年進行で施行されている。M県内の高校では、SSH指定高校等を中心に、新学習指導要領の「総合的な探究の時間」に示された目標「社会と自己との関わりから問いを見出し、自分で課題を立て、情報を集め、整理分析し、まとめ・表現でき、課題発見・解決に向けて、互いの良さを生かしながら新しい価値創造とよりよい社会を実現しようとする態度を養う」につながる高大連携に力を入れて取り組んでいる。筆者はそのような高大連携を「探究学習型高大連携」と定義し、大学の講義や実験・実習等の一部を体験させ、将来のやりたい仕事ややりたい職業をイメージさせることで、進路選択に結び付ける「体験型高大連携」と区別している。

筆者がM県内のA高校で担当している高大連携活動は、教員志望の高校生に高校の近隣の小学校で1コマの授業を実践体験させる「体験型高大連携」として、2019年度は月1回（4月～11月のうち6回指導、11月に実践・振り返り）の高校での対面による授業設計の指導を行っていた。しかし、コロナ禍の影響により、2020年度当初は高大連携活動自体を実施できなくなっていた。2020年6月頃、高校現場においてもオンライン環境の整備が進み、A高校からオンライン環境（Google classroom, Meet）を使った高大連携活動の依頼を受けた。

大学では、2020年4月からオンライン授業（Zoom等）の急速な実施が広がり、様々な問題点が生じていたことから、教員志望の高校生に小学校での授業実践に向けた授業設計の指導をオンラインで行うことは困難に思われた。そこで筆者は、教員になるための小学校での授業実践体験に向けた指導ではなく、授業設計から成果の検証方法までを高校生が自分たちで考えることを重視したオンラインでの授業設計支援という方向に切り替えた。そうすることで、万

一、コロナ禍の影響の拡大で、小学校での授業実践ができなくなった場合の対応（高校生による教材作成等）も検討できると考えた。

2. 対象と実施方法

本稿で対象としたのは、2021年度に筆者がA高校で担当したオンラインでの授業設計支援の高大連携活動に関わった21名の高校2年生である。2020年度は対象となる高校2年生が7名と少なく、活動も6月開始で、小学校で授業実践できる時期も直前まで定まらない状況であったため、対象から外した。

実施方法は、2021年度は年度当初（5月）から毎月1～2回オンライン（Google classroom, Meet）で実施ということが高校側との確認で決まった。そのため、高校生に提供する学習コンテンツを事前に準備することができたので、Google classroomに学習コンテンツを掲載し、事前に課題に取り組みせ、オンライン授業当日はMeetで高校生から大学教員（筆者）が課題の取り組み結果を聞く形式で高校生の主体的な活動を中心に進行することができた。（表1）

表1 2021年度の活動

(G+M)=Google classroom+Meet	
4月	(前年度のポスター発表見学)
5月	月2回オンライン実施(G+M)
6月	月1回オンライン実施(G+M)
7月	月1回オンライン実施(G+M)
9月	コロナ禍の影響で在宅実施(G+M)・延期
10月	月1回オンライン実施(G+M)
11月	月2回オンライン実施(G+M) (2つの小学校での実践が決定)
12月	12/3に2つの小学校で対面授業実践

学習コンテンツ掲載

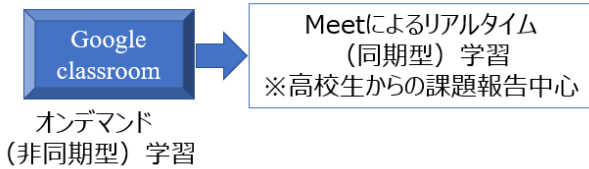


図1 学習の流れ

表2 Google classroom 掲載の課題等

課題 1	・小学生にどうなって欲しいですか？ ・小学生について知っておきたいこと
課題 2	・グループで担当する係を決める ・学習目標などを話し合って決め報告
課題 3	・小学校へのヒアリング項目等の確認 ・学習目標から課題分析まで作成
課題 4	・小学校訪問報告と入手情報の共有 ・授業企画書例を閲覧
課題 5	・授業企画書作成状況の報告
課題 6	・確認テスト&アンケート案作成・共有
※小学校での授業実践後の振り返りは省略	

表3 12月の授業実践

対象児童	授業実践担当 (高2生)
X 小学校 4年 U組	5名
X 小学校 5年 M組	4名★
X 小学校 5年 T組	3名★
Y 小学校 4年 8名	3名☆
Y 小学校 5年 18名	3名
Y 小学校 6年 13名	3名☆

表4 授業実践報告 (X 小学校 5年★グループ抜粋)

目的	習熟度別クラスによって算数が好きな人の人数に関係があるのかを調べる。また、生徒の理解を高めるのは、講義型の授業かグループワーク型の授業なのかを明らかにする		
結果	Q 算数は好きか	M組	T組
		15人	9人
	好き	5人	10人
	普通	8人	7人
	嫌い		
結果	Q 授業は楽しかったか	M組	T組
		20人	19人
	はい	8人	7人
	普通	0人	0人
	いいえ		

3. 実施内容

オンライン (Google classroom, Meet) を活用した実施の流れは事前に非同期型学習に取り組み、Meet による同期型の学習 (主に高校生からの課題取り組み報告中心) の組み合わせで実施した。(図1)

課題は PowerPoint で作成した6種類のスライドを Google classroom に毎月実装し、高校生に次回の授業で課題の取り組みを報告してもらうことを伝えた。

(表2) 課題にはほとんどの高校生が高大連携授業当日 (オンライン接続開始) までに回答を提出できていたが、未提出でも口頭による報告で後日提出も可とした。

当初は1つの小学校で実施予定であったが、高校側と小学校側での調整に時間がかかり、直前で2つの小学校で同日に授業実践することになった。(表3)

(2) 小学生にどうなって欲しいと考えて授業を行った結果を自己評価してください。 →4段階で最もあてはまるもの一つ選択してください。	
考えていた通りに授業を行えたかどうか、わからない	5
考えていた通りの授業は行えたとはいえない	12
考えていた通りの授業を行うことができた	3
考えていた以上の授業を行えたと見える成果があった	1※
※→小学校で授業をする前に何度かリハーサルをしていてそこで時間調整として予定にはなかったところをプランのなかに入れたのですが残りの時間を考えてそこができなくなってしまったからです。でも残りの時間を見てやらないと決めたことで授業を時間通りに終えることができたのでそういう点では良かったのかも知れません。	

図2 高校生の事後アンケートより

4. 結果と考察

高校生の事後アンケートによる自己評価では、考えていた通りの授業を行えたとはいえないが多い。

(図2) これは想定外 (コロナ禍のため想定以上に学習が進んでいない、掃除からの戻りが遅れて授業開始が遅くなる、答えだけ教えてという子への対応に手間取るなど) のことが多かったとの理由による。

授業実践後の振り返り以降は、大学教員による支援は行っていないため、4グループ毎の授業実践報告の作成から高3の4月のポスター発表までは、高校生のみで作成・発表に取り組んでいる。表4はその報告の抜粋である。まとめ方などの点については改善の余地はあるが、自分たちで考えて目的を定め、小学校での授業を実践し、その成果を明らかにできていることは評価したい。今後は非同期・同期によるオンライン学習の効果の面について分析を試みる。

参考文献

- (1) 宮下伊吉: “高大連携における学生主体の活動による受講者満足度への影響”, 令和元年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会研究発表予稿集, 第14回, pp.252-255(2019)
- (2) 宮下伊吉: “SDGs 探究 MAP を使った高大連携セミナー”, 日本教育工学会第36回全国大会論文集, pp.313-314. (2020)
- (3) 宮下伊吉: “SDGs 探究 MAP を使った高大連携講座におけるオンライン掲示板 Padlet 活用の効果”, 教育システム情報学会第5回研究会論文集, (2022)